

はくかんさん

ホンモノになる

第83号 H24年秋号

伊豆市 法住寺 発行

真間山弘法寺の石野日英貫首さまが遷化された。

*

昭和四十五年四月、立正大学仏教部三年に編入、その時以来の親交であった。彼は学生時代からホンモノを求めていた。もう来春には卒業というある日、「インドへ行こう、釈尊の聖地を一緒に歩こう」と誘われた。

乏学生の私には思いもよらない話だった。

インドではカルチャーショックの連続だったが、何より「はだしの人々」が心に残った。初めは裸足であることを見下していたように思う。それが日がたつにつれて裸足だから不幸なのだろうか、裸足には裸足の幸せがあると思うようになった。靴を履いている者が裸足を見てかわいそうと思うことは傲慢であろうと。それは常識的、観念的な見方からホンモノを見る第一歩であった。

*

先代の介護や本堂建設で早期退職し少し余裕ができた十数年前、武相荘（ぶあいそう）へ行こうと誘われた。武相荘は白洲次郎、正子の旧宅で記念館として開館したばかりであった。そのしつらえを見て正子の目利きに感じ入った。李朝の焼き物や小机、骨董品としての逸品、そうした品々と一緒に農家の庭先に転がっているようなカゴや農具が輝いていた。そこには社会的常識や観念を乗り越えたホンモノを見抜く目利きがあった。

*

当山本堂落慶式の祝辞は、「Aの五番の指定席、石野でございます。」から始まった。もう五番目の祝辞など飽きている、そこで形式を越えた臨機応変のホンモノの祝辞だっ

真間山一行が伊豆法難150行脚で当山へ 中央に貫首さま、住職



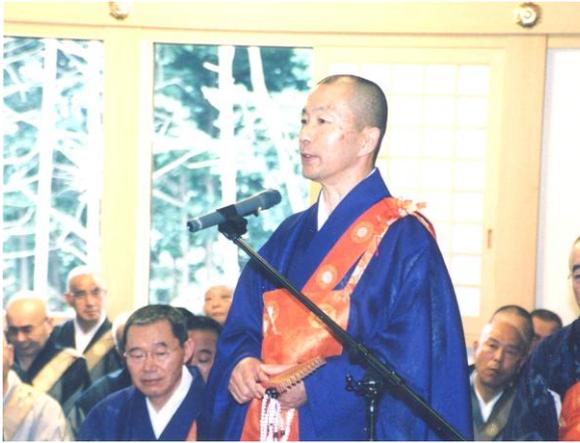
た。殊に「この本堂をガランドウにしないように」は檀信徒の心に残り、私の心にもズシリときた。その後、当時の森野正志護1

持會長さんはガランドウにしないようにしようと、よく言って下さった。今でも「力を抜くな」と、二人から叱咤激励されている想いである。

*

真間山弘法寺は日蓮宗の本山の中の本山といってもよい古刹である。彼は晋山してから、真間のお山全体にお題目が響きわたるようにしたい、教えを広める殿堂にしたいと先頭に立って汗を流した。またホンモノの僧侶を育てようと青年僧侶の育成に情熱を注ぎ、輝やく青年僧侶を輩出した。

高名、有名な方々との広い付き合いと共に、



当山本堂落慶式の貫首さま

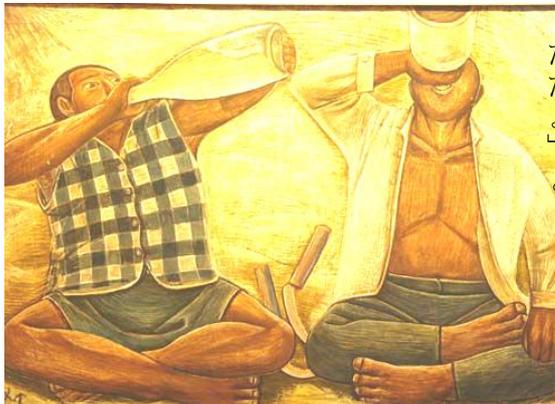
お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

漣 そして 祈り

好きな絵がある。

青森に住んでいたという農民画家、常田健さん（農業をして、りんごを栽培）によつて描かれた農民の絵。画面いっぱいの大らかな素朴な絵の中に、生きる力がみなぎっている。そしてあたたかい。その常田さんの詩



ただよ」と。

大自然と向き合つて生きる人々の中に、たくましさや謙虚さ、祈り、そして覚悟のようなものをひしひしと感ずる。

*

一般の僧侶、多くの檀信徒に対しても、分けへだてなく慈愛で接し、相手の良さを引き出していった。お山には自然と人が集まり貫首さまのお話を聞きたいと街なかから大勢集まり、薫陶を受けたいと青年僧が随身した。こうして彼はホンモノの本山の貫首さまになつていった。

*

今、貫首さまのホンモノを見る目、心を想う。さりげない日常の中にこそそうしたものがあつた、それを見出すことは何と楽しく豊かなことであるかと。

慈厚院日英上人 増円妙道 位隣大覚
広導諸郡生 令速成菩提 南無妙法蓮華經

「冬春夏秋

何回くり返しても良い季節だ。

ただくり返していてくれれば

それで満足だ。

このくり返ししかないように願う」

短い言葉の中に「人間の思い通りにはならない自然」と生きてきた人の深い

祈りを感じる。

*

転じて

「幸進丸」という船があつた。誰かが

「幸せに進むということですね。いい

ですねえ」と言った。

船主は答えた。

「いやあ 幸いにも ここまで進んでき

ただよ」と。

大自然と向き合つて生きる

人々の中に、た

くましさや謙虚

さ、祈り、そし

て覚悟のような

ものをひしひし

と感ずる。

*

お陰さまで、無事にお会式を終えられたこと、続く日々の山務に夢中で働くことのできる自分があること、ふと境内に咲く清楚な花々に感動を与えてもらい、なぐさめてもらえることに、心から感謝したいと思う。

トピックス

お会式

大勢の皆さんのお力で、今年もお会式を行うことができました。お会式は、時代と共にかたちを変えながら、お祖師さまへの報恩感謝として何百年も続けてきた誇れる地域の文化です。

今年も九月の役員会から始まり、お勝手女衆の打合せ、何日も前から万灯かざりやコ

ンニヤクづくり、

前日の餅つき、

そして当日早朝

からのご奉仕、

そして片付け。

当日の朝、お

手伝いの女衆さ

んから「今日は、

宜しくお願いし



皆が心持ち良く報恩の読経

ます」と気持ちの良い挨拶を頂いた。「自分たちのお会式」という気持ちを感じとても嬉しかった。

これだけ多くの皆さんの力を結集してのお会式です。そのご尽力を思えば、ぜひ皆さんに参加して欲しいのです。住職の力不足は

承知していただき、どうしても都合がつかない事もあるでしょうが、何年も参加していない方、来年はぜひお顔を見せてください。



献灯献花

万灯

今年は小雨が降ったため本堂で行いました。献灯献花の子供たちまとまりのあつ



右 今年も子供たちの献灯
左 本堂内での万灯

て良かったという声を頂きました。

夏の寺子屋

今年の夏も寺子屋に多くの子供たちが集まりました。今年はずりくライミングを行いました。駐車場の大きな樫にロープを張って、インストラクター指導のもとで大木に登りました。高さ10mを超える木の上は風が違くと、参加のお子さんの感想です。お経、花火など楽しく有意義なお寺での二日間を過ごしました。



尚、この行事には食事の準備や入浴送迎等、多くのボランティアのお力を頂いています。ありがとうございます。

池上万灯



今年も十月十二日、白龍会（小塚順一会長）の皆さんが元気に池上本門寺お会式に団参しました。太鼓の万灯ばやし、マトイと楽しんで奉納できました。

来年は十二日が土曜日ですから、お勤めの方や、子供連れで家族で参加してもらおうと考えています。

伊豆連合大題目

伊豆連合大題目講（大川清仁会長、山下要理事）の大題目は十月二十日、伊豆長岡、最明寺で行われました。今年も当山から三十人を越す多くの檀家さんが参加、法要の後、本



成寺森久上人の
楽しい法話があ
り有意義なお詣
りができました。
来年は法住寺
が会場となる予
定です。

境内作業

九月初のお彼岸の作業は、元村②が境内周
辺の草刈りを行ってくださいました。

年末は小川の予定で、大木の枝払いや除草
を予定しています。

何時も、檀家の皆さまにはご奉仕頂きまし
て、ありがとうございます。おかげさまでお
寺に来る方々が褒めて下さいます。



洋明さんのおはなし

最近の若者は、「ゆとり世代」「マニユアル
世代」と言われています。

ゆとりはあるのに余裕が無く、自分に合わ
ないことがあると、まずは自分を合わせてみ
るのではなく、直ぐに次の環境やモノを求め、
言われたことしか出来ないなど、あまり良い
意味として使われることはありません。

*

私にも、小学3・4年の子供がいます。礼
儀作法を教えることは大切です。しかし振り
返ると、自分の都合のいいように「ああしな
さい、こうしなさい」と言ってしまうている
事に反省です。子供には心に余裕を持ち、自
分で考え、行動する力を養ってもらいたいも
のです。そのなかで、間違ったことをしたと
きはしっかりと叱る事も大切でしょう。

子供は親の「背中を見て育つ」と言います
が、子供に出来ていないことがあつ
たとき、実は親も出来ていないこと
がしばしば。親として口ではなく、
背中で示せるよう日々精進です。

*

親とは「木の上にたつて、子供を

見る」と書きます。いつも口を出し、手取り
足取りではなく、時には黙って見守るのです。
心配しながらも我慢の心を持ち、子供が転ん
だら自分で立ち上がるのを見守るのです。そ
して崖から落ちそうな時、そっと手を差し伸
べ引いてあげるのです。

その親にもどう仕様も出来ない事もあり
ます。手を差し出したくても出せない事も。
そのすべてを仏様が慈悲の心を持たれて見
守ってくださいています。昼も夜も、木の上
に立って見守る親と同様に。

*

お釈迦様は、蓮華経の比喻品第三で「其中衆
生 悉是吾子」（生きているもの全ては、私
の子供である）と説かれています。子供を木
の上から見守る親、その親子を見守る仏様、
皆仏様の子。

この白巖山を読んでくださっているあな
たも仏様の子です。子供は、親の思い通りに
は成りませんが、親も子供の思い通りには成
りません。つまり自分の思い通りに仏様はし
てくれるわけではありません。

それでもチョット心に余裕を持ち、仏様が
見守って下さっていると、誰かが自分を見守
ってくれていると感じるだけで心が安らぐ
ものです。

御志納金「八月〜十月」

十万円 元村 飯田政春殿 尊母一周忌砌
十万円 西 佐藤薫殿 尊父一周忌砌
五万円 元村 三田泰男殿 尊父三三回忌砌
五万円 伊東市 増田家御親族殿 寿量の塔納骨砌